

淨瑠璃晶繪

以岩紋
以高麗紙
以

754.7
H8v

to number

By Hokiesan

"Joo Ru Ri Bon"

from B.M. 1904. 9 f60.

淨園

璫璫會

璫璫

檀浦兜軍記

琴責の段

重忠耳にも入ぬとやわこわぬと初めの琴を
 弾初め事柄がぬがとのひ昭とお好と酒もあ
 げき重忠の危の心あふれなすひのくむる所
 琴のめ束と何とぞ裁かつともむるれと斗
 ちも花世の恥のぞうひのたあふるたけ
 ちも月の多人法ととも月の多人のげと

檀浦兜軍記

琴責の段

良友跼天

日庭詢披

蹤時絃奏

新翻曲隠

情還不疑



碁太平記白石新

の原のまゐ

そくまゐやうまゐやうにもやうにもあら
だけひきりたあのおちめがうゐてまゐる
ひめもけと何のまゐあつては情いふ中
ひえあゝとどろちあへけあて坂東屋礼も
ておひづるひめえとほつたいふとん
あやうとあふちあてたのあつち

碁太平記白石新

芳原の殿

山川千里

路尋姉到

青樓郷語

談郷事一

心斯報仇



川海音疏

油屋の妻

人目もかくいふ人追懐と見せあつめらる
先づいとお席づくと候ぬかゆきをよ金まで
たしぬにふるやうゆりださうくおまへに
是のついでにじづふあぬけはる
とお席とわれ合おまへかりれこふも金とや
つと云ふも皆うそめて候のこの河波の客に

川寄音頭

油屋之段

聽語深會

愠得書始

解疑惡徒

老杉板倉

恆与偷兒



祇園衆礼信仰記

上爛屋のぢん

定めぬ世の中や果報といふも惜しう
初のお托けも玉の連々華ふこのちの世うま
ぬしめが今世校の事の上様やと人をな
まもとも病の夜のお進へは煙が松の上で
まかも沢のさきの玉の山殿さあみそ山
かみかむが一俵いさうござんといと膝
かみかむが一俵いさうござんといと膝

祇園衆礼信仰記

三上爛屋のぢん

榮枯一宵

夢野艸中

花苗欲童

無所辨傳

母淚津々



増補天網鴻

茶屋のきん

あまびとを合せわづとてあて接とせよあて
 せよつめ時とていざだその目わつたあ
 命私人と親その母ぬれつたてい親も私人の
 死もあつたつとものさあつて私達も命
 つあつたあつたのさつとつたつとつた
 と接とも死ともあつたつたつたつたつた

増補天網鴻

茶屋のきん

戸外聞相

語貪生負

約辞三歳

綢繆意悽

為娼婦欺



小野道風青柳硯

道行公の歌

かきつたあはれあはれあはれの病の種り
今世の人れはうきこころもつらきもの
わが昔とよめと浦山いもあはれなる
あひへんあじあねるとあはれも幾つにお
のめあひぬめあはれもあはれとてあはれ
わがもあはれあはれあはれあはれあはれ

小野道風青柳硯

道行公の歌

女子本情

癡々情々

不知鴛鴦

匹難會掩

涙赴前池



女舞釵紅楓

三勝縁切の段

ある後ぬこと深きなりともやいかにや
 心もてまきこころのうちにきこころの
 たのむのむあんのこい他人さのめをけすも
 とむのぬがぬの役とらふがなるも涙ぐもさは
 ひんかひちぐさすと縁と切て下されきと情
 り多きとぬこころのぬもいもさもぬるもぬるも

女舞釵紅楓

三勝縁切の段

良女愛友

厚數歳兒

亦懷阿姑

通倫理其

言一那垂



假名手本忠臣藏

九段目

こゝ浪わのしとてさきあき妻かこむとてうれん
焼のもどよりあるあいでとてふとあふに料も
あひふとふにさるゝ因果との因果のききと
あふふとさきとさるゝとさるゝとさるゝと
あふの下あふあふになとさるゝとさるゝと
あふとさるゝとさるゝとさるゝとさるゝと

假名手本忠臣藏

九段目

紅葉受風
色蒼霍在
陰声忽然
一字勿呼
得各會情



漆摸様妹脊の門松

見世の巻

あつひくとも姫ごせの机あれるのいふ人
親も母も権持て及ぬかほくらせのわへまに
まだくあつひく多々の風景のより極でい後帯
とめめがえ付らんとしてうやわ漆は後帯い何
るぞとさうめふあつて及ぬくのこの美とそ
いの身へまのこあつらんじつとぶもうやあまね

漆摸様妹脊の門松

見世の巻

斯身有呀

許骨肉不

持團裙裡

同心結浴

時奈母者



あな房深分ち網 三言ふれの段
 トムトムとこつとあつとちつつけのあや
 乃中奴も目からけまぬに娘もあかぬ
 ぐづろとゆまぬとあ上にもゆまぬこれ
 山ののち葉子もぐづろとあつとあつと
 筋もつとあつとあつとあつとあつと
 とぐろも用わふお乳の人まの井かあつと

戀女房深分ち網

三言ふれの段

縁錢と糖
 餅有侍戯
 嬉榮私意
 縁公事難
 伸奴子情



加賀見山故郷錦

四ツ目

おきよのやうもどきよりおきよのやうの今
 のやうもどきのやうもどきのやうもどきの
 子やあかしのやうもどきのやうもどきの
 封と切てふてのやうもどきのやうもどきの
 れば色じやうもどきのやうもどきのやうもどきの
 去るののやうもどきのやうもどきのやうもどきの

鏡山故郷錦

四ツ目

街古繻不
 吉鴉噪兆
 何凶匪書
 難待到決
 意此開封



傾城阿波の鳴門

順禮奇の段

ののふちのうゑにわが情の別れさむじあひ
 こふふちとてふておれはるる程ゆき
 とおれふちのうゑにわが情の別れさむじあひ
 ののふちとてふておれはるる程ゆき
 とおれふちのうゑにわが情の別れさむじあひ
 ののふちとてふておれはるる程ゆき

傾城阿波鳴門

門順礼と段

幼女慕双

親傳奇慘

懐久遇

不相知懷

金熒父手



桂川連理柵

帯屋のだん

おせんのおにやうにたう合やうのいぬやどおき
 のおちあるおきうきとさきさうつおさんとおひ
 切きさうくでるあつてくされでたがひれぬ
 もゆりせろのうらひもひさうおむさくとれんぬ
 那てぬるといほちあつて月（の）んでたおやうく
 ねのまうきとらにうたう月（の）うらまむ

桂川連理柵

帯屋の段

憐愛自嬰

兒遂爲結

髮歟死生

心尺決郎

勿復謬々



箱根靈驗壁虎仇討

九ツ目

まてふかゝのまゝなごころて老じしつゝめ
 とむるまね柄態(むねくら)ののどろき
 かゝのまねひらんで飛まつむこむこひ
 食ぬ飯落さると打とあつゝあの中や地の我ひ
 性(しやう)のつゝもろくかあぬこゝろとせもなぬ
 蝶の金銭(かぜ)のたゆ(か)ひひはれのきへん

箱根靈驗壁虎仇討

九ツ目

白蝶追殺
 蝶粉々撃
 隨庭似表
 源家勝飛
 翔振粉細



夏祭浪花鑑

四段目

夜もあつたのうねりもつゝあひだひてゐては
 けうがうかじにちつぽ目のあつて何うと
 門の中よりさぞたあゝもなういふけある
 び清七かあゝとあゝいふまゝにやうき
 く妻かあゝひいゝのまゝで寝てゐて
 やく夢と妻かあゝあゝあゝいふとあゝ

夏祭浪花鑑

四段目

戸内爲卿
 嘆戶外弁
 君声所心
 逼一板鎖
 鑰奈無情



平假名盛衰記

四ツ目

もろや日本風に梅枝が折る様も仏もか
いのやそれふまなにいふやあつるかきなり
我のゆたかぬれぬぬれと一念たれか
かきんいのやとそれさるはあやむむとび
よにもた伏せし人か知せばしと極
おのれはさふむる人の種とほけらうとく

平假名盛衰記

四ツ目

聞道中山

李内有無

聞鐘不憚

墮獄劫救

急爲君椿



奥の細道

奥の細道

今も昔も同じく父の家の前を歩くと
 ともかくもひとひさし世のまゝも
 江戸がくさる月夜にさる人々のこゝろは
 明てあつた十のころのつゝある秋の夜はぬれ
 父の祖母のあつたひさしに
 あつたれとわうたひさしに
 娘をなれぬ

奥の細道

奥の細道

離夫又負

親一女頼

孤身号泣

及明矢隣

見不幸也



義経千本桜

四段目

津のりえと海切付るそひつりて飛のま
 飛あさうとつめとあつるそとせりてれ
 てんのあひひもつめとあつるそとせりてれ
 づりの静が静あつるそとせりてれ
 八徳の軍わづらうとあつるそとせりてれ
 那て津平入とつめとあつるそとせりてれ

義経千本桜

四段目
孤忠信ノ段

無端一刺

撃避刃忽

翻身寄蹤

優劇事小

鼓數声頻



神靈矢口渡

田の口

鹿ひのてし出せばあひづけあつた念が狐の
 面とらふりもろくもあつるあつたおとと
 百姓た万八もびつろりそのひた念の作り
 やとらぬづけ授けあつたそのひた念の作り
 山神院法あんであつたと横飛とんとまつ福
 のあつた百姓たあつたの毛たあつたとまつ福

神靈矢口渡

田の口

屏扉何所
 在卓爾野
 狐精不料
 假粧状村
 民總喫驚



太平記忠臣講釈

六日月

コヤ親父おちつと抱んで下まつますここのま
くは出（こ）かこいもわのふきにこそ
あれあやわのうの懐か入このの残食ぞい
わのこるもあられ乳のわのひまあると潤も
まてぼて下されけ切まのわのひまあると潤も
ん生目て親のまにぬる去来を後でひるが

太平記忠臣講釈

六日月過君の段

有婦留行

客逢翁抱

幼兒一語

知愁苦宛

定与乳哺



夏祭浪花鑑

冒殺の段

後のまゝいむむとたのめのやたぬぞ
 ござうまむぬ月(ぬれ)るあまのまゝあゝ
 しゃざいさうぬらぬまゝいむのハイヤ
 あてふまゝうらとねらやーやんつげうあ
 くちのめかまうつけあめちうけくま
 されころもあひのあぬもあゝいあゝ

夏祭浪花鑑

冒殺の段

貪夫唯見

偵志主不

忝忠罵打

途間辱忍

含韓氏風



近江源氏先陣銘

九ツ目

いかにこれいかに城内の今日の精軍のれ
も海多んの奥を借も中にあふ和回を及例
のち海救をさるむけ余程酒狂の折折
大石の入たてし重くさへ出和回を勝の
軍功大なる殿ありやうはびの山酒さうた
あてあるとこさうやうのちあさるこさあ

近江源氏先陣銘

九ツ目

今日城軍

利開筵賞

有功可憎

没入道安

討殺英雄



和田合戦

二の切

いざぶのあ市もらうざらと上のきくへきつて
 うつりもあはれどわきんがやとめどめ
 然とあつとがうとわきう権方もわにめ
 なるにたあまきのとんぐくあまきまきとあ
 ちふもろくともうこれいあめいあめあ
 かりばまきし誰か将のまあせんいまび門

和田合戦

二の切

城戸大旦

堅推破如

搦振多力

女金剛今

見板額娘



敵討つる錦

太平のまゝ

あひ下坂の相かぬ腕は秋まぐとてう
まもどれぬとまうちあつちうぐいさあ
イヤれううしあうあははひらあ
もあねああてあてあてあてあてあ
まもどんとあまどあひあああああ
ああああああああああああああ

敵討つる錦

土手れ段

竹杖藏雄

劔鋒鋌試

得寒不知

報仇士謾

作乞兒看



女庭訓

妹山の巻

むもひくも娘むのまことふたつ
 入はぐいしおの葉の母よりれり
 ることすねむすりく我をむさぎの毒と
 みて死むわかれ娘かあや中し果はむ
 あもむさぎのけあてさるるのやうに
 くひゆももひづかれけあてさるる

女庭訓

妹山の巻

女兒有所
 許何羨棄
 金璫慈親
 恩愛至相
 抱泣漣如



腰越状

後及法施の辰

やす惟りあひ多ふぞれしとぞのせせとぬるぞ
 やしかなる用ひのせと法施といふげ衆とて
 の月々五出てかれが孔酒とあつるがうき世
 きてれとにいふくえしとあめ我服力が
 遠ひやまきとたえんといふとやと
 切て初ひとやととぬもあつていなる

腰越状

後及法施の辰

醉漠真豪
 傑婦如何
 得知耳邊
 一声硬許
 箕副軍師



奥羽安達ヶ原

一ツ家の辰

イあのつゝ内かぬふとどろかてあまイヤん
 安ふされりつを後とたちりつてあまぬ
 はつゝのつゝのまてあふらでだつゝのつゝ
 いあつゝいあひさつゝてあふらぬ
 ちあつゝとどろれアイとてねもぶらいつゝ
 もりあれと殺してあふらとまもぶらいつゝ

安達原

一ツ家の辰

鬼姥揮盾

刀將以割

孕婦々々

奥所逃乞

憐唯合手



双蝶々曲輪日記

ちんちんの腰おせしつゝあつていひきつゝ
 肉の商ひも拂ひも姉妹二人が動かあられふと
 すゝも腹をそののねずもあるうのいながぬいて
 切りけふがどつろが接て切りけふがひたいに
 湯髪をさう持もより佳の病今さうやう方
 まづ難むぢあぬぬぬぬ人中でるのりふ

双蝶々曲輪日記

魁梧如年
 客俠骨不
 相推使氣
 多睡眊微
 言在報知



罪取三代勝負附

秋津嶋四ノ段

ねえ送りて秋津嶋のへきさつる巻のねえ
戸付る後の方なわお星ののこことねえ
さかりる金ののりたさう同はイヤとちねえ
ふれうあづうあふんいばあめの金おねえ
ゆふさあふんいばあめとねえ
ゆふさあふんいばあめとねえ
ゆふさあふんいばあめとねえ

罪取三代勝負附

秋津嶋四ノ段

他家四百
金良々全
用盡妾憂
來取時方
見丈夫窘



扇的西海硯

けせうきあゝの辰

然ふあづむ小を希がりんやひあゝんとさく
 とまゝさうやうさきあゝとまゝさうやうさきあゝ
 まどあゝとげんやあゝとげんやあゝとげんやあゝ
 とどとあゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
 中じあゝとの依り連てんらんげんやあゝとまゝと
 うるふのとあゝとあゝとあゝとあゝとあゝとあゝと

扇的西海硯

怪粧屋敷段

久聞家有
 妖何料起
 今夕射于
 現怪形直
 按鋸刀刺



恋娘昔ハ丈

城本屋の版

せんか娘とふか娘とのまよハの何のさるしや
 せんかのさるふか早うさるるならんしや
 せんかのさるふか早うさるるならんしや
 せんかのさるふか早うさるるならんしや
 せんかのさるふか早うさるるならんしや
 せんかのさるふか早うさるるならんしや
 せんかのさるふか早うさるるならんしや
 せんかのさるふか早うさるるならんしや
 せんかのさるふか早うさるるならんしや
 せんかのさるふか早うさるるならんしや

恋娘昔ハ丈

白木屋ノ版

蛾眉掩双
 袖香鬢带
 愁悽如魅
 老看店欲
 領満顔啼



源平布引瀧

馬段

平家もつゝのちあやうきものやあら
 今もつゝあやうきものやあら
 このやうきものやあら
 あやうきものやあら
 あやうきものやあら
 あやうきものやあら
 あやうきものやあら

源平布引瀧

馬段

幼見持上

首欲以報

深仇英氣

今如此後

來無匹儔



姫小松子日の遊

鳴りのやう

一面の鏡あふかたづゝ鏡六種の出来おちあはるゝ
 あつてはれども私も武士の妻おふとてさぐりの如く
 憐れむさんとの山敷ひむつあゝどくもらぬ人の
 金おとふりよるどくもらぬいふやあ止むるかな
 ありとる放せとわさぬ一面の鏡か二人の顔
 さうと顔とあゝあつたれゝ鏡と持て金打といふ

姫小松子日の遊

鳴りのやう

両臂携双
 鏡苑來偏
 迫々煌々
 證得好心
 上個與塵



川崎音頭

ちよんがれがー

いさへ海でも洋へいさでもつめこれ海
 多てもくんあむじのころもいさく海世
 めまの浦でもをと酒とのち市所か月の
 眉どもあやうけ目えどひんにさうこあん
 ろと味やをんいさうまう斗りさうさう
 か炭いくるまのなぶるのまどなこのかて

川崎音頭

ちよんがれがー

話説長峰
 妓無雙阿
 紺娘高情
 誰得降獨
 芥福家郎



菅原傳授子習鑑 楊九切後の辰
 生ておれぬお初めの初ひさ煙けて後切刀
 祝のもつろ下されこの女方た我か伐つて
 われちゆれ後の孝りおむむととまてまき
 まの初女方ととととと上仇あるま海のお
 お初祝まれの山あふまおわの流されぬ
 主云初か切後ゆけは八まもまといひまぬ

菅原傳授子習鑑

楊九切後の辰

不負郎君
 意夫妻達
 密情訣別
 拍生日欲
 同謝釀成



苧萱素門筑紫轢

かき金の版

二ふねどころのまゝしじつとひつてゐ
 へふねんてふしめふ人のま髪まつまふ
 へびのめくめくびつるまふひあふめふ
 ね髪てふげまのたまてねもめつしひハダ
 夢じしけめめふちうめのかなめめさ
 れるふのめめはのめつうねかえくめん

苧萱素門筑紫轢

かき金の版

緑髪者何
 美鬪歎忌
 那深可愛
 婬娟猶可
 憎嫉妬心





